

# SRM学会 20年度関東部会

## コロナへの危機対応などテーマに

ソーシャル・リスクマネジメント学会(上田和男理事長)は11月21日、2020年度関東部会をオンラインで開催した。新型コロナウイルスの感染拡大で、5月に予定されていた全国大会と7月の関西部会が中止となり、関東部会が本年度初めての学会開催であったこともあり、参加者は50人を超えた。上田理事長の開会の辞、中居芳紀関東部会担当常務の歓迎のことばのあと、4人の報告者が研究報告を行った。

### 未知の事態への備え強調

第1報告の赤堀勝彦氏(長崎県立大学名誉教授)は「企業の新型コロナウイルスへの危機対応」と題し、今般の新型コロナウイルスがもたらした危機は、企業がこれまで想定してきた緊急時対応・危機管理とは大きく性質が異なるものであり、その影響が全国的・全世界的に及んでいること、今般の新型コロナウイルスへの危機対応に大きな特徴があると語った。また、一部の拠点で事業継続が困難である場合に、これを他の拠点・本部等で代替するといった発想が通用せず、全社的な視点の閉鎖や在宅勤務を余儀なくされる場合、いかんにかして事業を継続するかが大きな課題である

### ホテル業界の現状を考察

第2報告の山川雅行氏(大阪観光大学)は「インバウンド依存に対するホテル経営のRM」と題し、新型コロナウイルスの感染拡大により大打撃を受けたホテル業界の現状を考察し、優良ホテル企業と倒産ホテル企業の違いをリスクファイナンスの観点から考察した。山川氏は、ここ数年

### 文化的側面で働き方考察

第3報告の浅津光孝氏(浅津中小企業診断士・社労士事務所)は「文化を取り上げ議論した。山川氏はホテル事業において、自然災害や感染病等の不可抗力による事業継続が困難になるリスクを常に把握し、適切にリスクトリートメントが必要である」とし、「リスクファイナンスの観点から、保険に転嫁が難しいリスクは保有するしかないため、積立金等の内部留保に努め、中長期の視点に立つて財務体質の強化に取り組む必要がある」と強調した。

## オンラインで開催、4氏が研究報告

「大規模なインバウンド依存に対するホテル経営のRM」と題し、新型コロナウイルスの感染拡大により大打撃を受けたホテル業界の現状を考察し、優良ホテル企業と倒産ホテル企業の違いをリスクファイナンスの観点から考察した。山川氏は、ここ数年

から考えるニュータイプ「働き方」と題し、新型コロナウイルスの感染拡大による急激な環境変化とそれに伴うテレワークをはじめとした働き方の変化および将来について、文化的側面からの考察を交えながら分析を行った。まず、浅津氏は日本の労働生産性の低さについて

### 生活排水の現状と課題

第4報告の松永光雄氏(東洋大学)は「生活排水リスクと持続可能な街づくり」と題し、2015年、国連総会で世界共通の目標として採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」(SDGs)の達成目標の一つである水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する点に着目し、わが国の生活排水の現状と課題について論じた。

山川氏

赤堀氏

上田氏



浅津氏



松永氏



森氏

とされるが、国民の約1割の人々が処理施設のなない地域で浄化槽を設置せずに、生活排水を未処理のまま側溝や河川に放流している事実を報告し、生活排水による環境や生態系への影響を取り上げ、松永氏は、汚染された生活排水を多量に流出するのは飲食関連企業であるとして、この効果的な取り組みをすることで、水質浄化が期待できると述べた。さらに、それは企業としての社会的責任であり、SDGsに向けた取り組みに寄与することに連なるとし、地域の健康・衛生リスク低減策として排水処理装置であるグリストラップの清掃方法を改善することを提案した。

4氏の研究報告に続いて、森幸弘副会長(下関市立大学)は閉会の辞の中で、今回のオンラインによる部会開催の関係者の労をねぎらったほか、オンライン学会開催の意義について積極的な見解を表明し散会した。